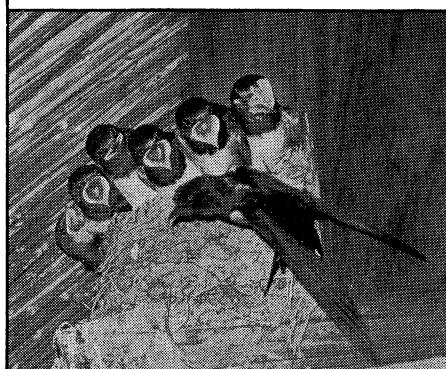


サークル紹介

現代アメリカ口語英語研究会

福島大学教育学部教授

西村 嘉太郎



図書館コーナー

この会の正式の名前は「現代アメリカ口語英語研究会」という。郡山市民会館を主会場に、隔月ある土曜日に集まる、英語教育に関心を持つ人々のサークルである。間違いないと思うが昭和五十一年の秋に発足して、第一回のテキストはB・マラマッドの「アントン（從業員）」であった。当初名稱などなかつたが、今年勇退された安藤四加男先生のお骨折りで、県を通じて文部省から運営費をいただくに当たつて規約とともに制定された。

セミナーとして最も適当な人数と判断したからである。会員の自己規制は厳しく、三度（つまり半年）例会に無断欠席すると除名されることもあり得る。実はその席を待っているウェイティング・リスト上の先生もいるのである。

会の運営はすべて英語で行われる。クラスでジャバニーズ・イングリッシュを使用することについての議論は色々あるが、例えば読んだ小説の筋を英語で説明したり、人物描写を簡潔に述べたり、タイトルの含む所を解説したりすることは、英語を教育する者として避けられないことだという姿勢なのである。前もって次のような八つの議論の柱が与えられていて、参加者はそれについて意見をまとめてくるこ

とにになっている。(1)タイトルの意味
(2)プロット (3)登場人物の性格 (4)作品の背景 (5)内的葛藤 (6)テーマ (7)作者の視点 (8)文体。

一通りすべて発表してもらうが、テキストの内容によつて議論の重点は変わるのが当然である。ある小説では(4)を広く、またあるときは(7)を深く、異見を出し合い会はすすむ。(5)、(6)などは抽象的に表現する内容でもっとも苦労するところである。用意した私見をのべ、他のうまい発言を羨み、活発なやりとりが続く。筆者はモジュレーターを任じていてがどうしても発言が多くなり反省している。毎回びっしりノートをとつて発言の度にその解釈の素直さで驚くばかり、忙しい公務、手の抜けない家事、重要な局面に立つ校外指導までこなした上での読書はざぞ大変と思われるが、その熱意と努力はそう簡単に挫けるものではなさそうだ。

佐藤瑛子、東富男、芳賀良夫、佐藤美子、石井ミチ子、内村正則、阿部芳夫の諸先生に英語塾の酒井蓉子さんなど筆者の問題提起の方向をみきわめて答案を用意され集まつてこられる。更に独自の解釈に加えて、筆者の持論であるキーワードの分析も参加者全員が必ずしも一致することではなく、頻度数とそのデータの分析など一寸したべる。J・アップダイクの「同じ扉」に挑戦する。彼の「走れウサギ」を分析しているので初見参ではない。ふと気がつくと間近かに迫つた会への慌しい準備は誰しも持つ共通の経験である。

この次こそ十分余裕を持ってと思うのは会のあと御苦労会で一杯入つての誓言である。でもまた発表を求められないので、隅にひかえるのもやむを得ないお互いの生活である。とにかく楽しいそしてちょっぴり苦しく辛いサークル活動ではある。

今までの二十七冊のテキストはア